



Vol. 60

CONTENTS

【コラム】「手書き」を活かした教育を… 坂東 宏和

【解説】情報科における研究会活動の意義と高校現場の研修体制… 山本 博之

COLUMN



「手書き」を活かした教育を



教育の情報化が進む中で大学教育では、学生が文字を手書きする機会が減っている。レポートや卒論はワープロで執筆することが一般的であるし、講義のノートとりもキーボードで入力、あるいは、板書をカメラで撮影して終わり、という学生が増えている。また、スライド中心の講義ではスライドのサムネイルが提供され、そこに簡単なメモを追記する程度ということも多い。情報化により効率的かつ便利になったことは確かである。しかし教育においては、「効率的・便利＝良いこと」という単純な図式には疑問を覚える。長い文章を作ったり、推敲したりする作業は、手書きよりもキーボード入力の方が優れている。一方で、手書きの方が学習の理解を深め、記憶にとどめる効果が高いという意見もある。レポートや卒論の執筆まで手書きが良いとは思わないが、教育の一部に意図的に手書きを取り入れることで、より効果的になる可能性もあると思う。

このような考えに基づき、手書きと教育をキーワードとしたさまざまな研究を行っている。そのための基本技術として、筆者が関係しているアイラボ（株）では、教育用途に最適化した実用的な手書き文字列認識技術や数式認識技術の研究開発を行っている。また、ポトス（株）では、これらの技術を応用し、手書き文字の字形の綺麗さや筆順の正しさを判定する技術の研究開発を行っている。今後もこれらの基本技術を活かしながら、手書きを活かした教育支援ソフトウェアの提案と、手書きを教育に取り入れることの有用性を示していければと考えている。

ところで筆者は、論文誌「教育とコンピュータ」（TCE）の編集幹事を仰せつかっている。先ほどの例では、昔から広く取り組まれてきた研究テーマである手書き文字認識に、教育分野での活用という視点を加えることで、新たなニーズや研究課題が生みだされたと考えている。このように、教育を自身の研究の具体的な応用先の1つとして捉えれば、新たな研究課題が生まれ、より良い教育の実現に貢献できる可能性もあるのではないだろうか。さまざまな研究分野の方々に教育という研究分野への興味を持っていただき、新たなアイデアを通じてこの分野を活性化させ、その成果をTCEへ投稿していただければ幸いである。

坂東宏和(獨協医科大学)